

特別支援学校において経験の浅い教員が継承したい、 経験の浅い教員に継承して欲しい専門性に関する一考察

岐阜大学大学院教育学研究科 守屋 朋 伸
冲 中 紀 男
坂 本 裕

はじめに

近年、学校教育における課題の複雑・多様化、学校現場を取りまく環境の変化に対応すべく、教員の質の充実が求められている。教員の資質能力の向上方策の検討に当たっては、経験の浅い教員がここ10年間に大量に誕生することへの対応も見据え、教員が教職生活の全体を通じて不断に専門性を高めていくことを支援するシステムづくりが喫緊の課題として挙げられている（中央教育審議会教員の資質能力向上特別部会、2010）。

特別支援学校においても、経験の浅い教員の大量誕生への対応が新たな課題となり、特別支援学校教員としての専門性をこれまで以上に明確にし、その教育実践の向上が喫緊に取り組むべき課題の一つとされている（川住、2006；永松、2006；加藤、2008）。

こうした状況を踏まえ、特別支援学校教員の専門性、特に、経験の浅い教員が継承したい、経験の浅い教員に継承して欲しい具体的内容について学校現場のレベルで具体的に検討する際の手がかりとなるような資料を収集することを目的として本研究に取り組むこととした。

方 法

1. 対象校

A 特別支援学校

A 特別支援学校は小学部、中学部の義務教育段階の児童生徒を対象として、自立活動を中心とする教育課程、知的障害特別支援学校教科を中心とする教育課程、一般教育に準じる教育課程のいずれも実施されている特別支援学校であることから選定した。

2. 対象者

- ・経験の浅い教員（特別支援学校教員経験3年以下）6名
- ・熟達した教員（校務分掌長担当者）5名
- ・管理職（校長、教頭、小学部主事・中学部主事）4名

対象者は、管理職、熟達した教員だけではなく、経験の浅い教員の意向も聞き取ることによって、学校組織としての経験の浅い教員に継承したい、養って欲しい専門性の集約を図ることができると考え、選定した。なお、15名全員から回答が得られた。

3. 質問紙・調査項目

国立特別支援教育総合研究所（2010）が示した「肢体不自由教育に関わる教員の専門性の構造図」、「専門性に関する自己評価シート—肢体不自由教育分野—」を基にし、質問紙「特別支援学校教員の専門性に関するアンケート1」として特別支援学校教員（肢体不自由）の姿勢や力量に関する内容、質問紙「特別支援学校教員の専門性に関するアンケート2」として具体的な実践的技量（肢体不自由教育）に関する内容を採り上げ、調査を実施した。また、アンケートの項目以外に必要なと思われる専門性について自由記述の欄を設けた。具体的内容は、以下のとおりである。

(1) 特別支援学校教員の専門性に関するアンケート 1

国立特別支援教育総合研究所（2010）が示した「肢体不自由教育に関わる教員の専門性の構造図」で挙げられた項目をもとに、研修担当にて加筆修正した21項目を用いた。経験の浅い教員には、自身が高めたい力量、熟達した教員には、経験の浅い教員に継承したい、養って欲しい力量、管理職には、経験の浅い教員に養って欲しい力量としてアンケートの回答を求めた。回答は複数回答可とした。加えて、それぞれの立場で特に重視したい項目を3つ挙げることを求めた。

(2) 特別支援学校教員の専門性に関するアンケート 2

北海道肢体不自由教育専門性向上セミナーで使われた「専門性に関する自己評価シート」をもとに、国立特別支援教育総合研究所（2010）が作成した34項目を、研修担当にて加筆修正した31項目を用いた。回答は、「特別支援学校教員の専門性に関するアンケート 1」と同様の視点で3者に求めた。回答は複数回答可とし、特に重視したい項目を3つ挙げることを求めた。

4. 調査期間

対象校の状況、1学期の実践への省察を踏まえ、更に、2学期、3学期の実践への期待も含めた意見が収集できるよう、2011年7月下旬から9月上旬に設定した。

結果と考察

1. 特別支援学校教員（肢体不自由）の姿勢や力量について

回答の結果を表1に示した。なお、記載した項目は、経験の浅い教員、熟達した教員、管理職の3者それぞれが回答した項目で、過半数を超える教員が回答した項目を採り上げた。なお、特に重視したい項目に

表1 特別支援学校教員（肢体不自由）の姿勢や力量に関する内容

経験の浅い教員・熟達した教員・管理職が共通して挙げた内容		
<ul style="list-style-type: none"> ・肢体不自由教育に関する様々な指導法を学ぶこと（姿勢や身体の動きの指導・摂食指導・情報活用等） ・実践を省察する姿勢をもつこと（自分自身をかえりみて、そのよしあしを考えること） ・子どもの支援に必要な人と手を組むこと（チーム・ティーチングや他職種・保護者等との連携） ・実態把握の力をもつこと 		
経験の浅い教員・管理職が共通して挙げた内容	経験の浅い教員・熟達した教員が共通して挙げた内容	熟達した教員・管理職が共通して挙げた内容
<ul style="list-style-type: none"> ・課題設定の力をもつこと 	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な教育的ニーズへの対応ができること（教科指導と重度重複障害のある児童生徒双方を受けもつことができる） 	<ul style="list-style-type: none"> ・本人主体の支援者として寄り添うこと ・「肢体不自由を治す」のではなく「子どもの主体性を伸長する」こと ・保護者や他職種との連携ができること ・障害に関する必要最小限の知識をもつこと
経験の浅い教員が挙げた内容	熟達した教員が挙げた内容	管理職が挙げた内容
<ul style="list-style-type: none"> ・子どもに合わせて教科指導を設定・実践すること ・知的障害特別支援学校における教科を自分の専門性に立脚して深めること 	<ul style="list-style-type: none"> ・障害のある子どもと人間としてきちんと関係がもてること ・「障害を変えよう」ではなく「愛情」や「生きる力」を教えること ・子どもの成長を支えること ・発達の全体像を描けること 	※該当なし

については、経験の浅い教員のみ過半数の教員が答えた項目がみられたが、熟達した教員、管理職ではみられなかった。そのため、複数回答があった項目をすべて記載した。

1) 三者ごとの意識の状況

(1) 経験の浅い教員

経験の浅い教員自身が高めたい力量として、6名中5名が挙げたものは、『肢体不自由教育に関する様々な指導法を学ぶこと（姿勢や身体の動きの指導・摂食指導・情報手段活用等）』、『実践を省察する姿勢をもつこと（自分自身をかえりみて、そのよしあしを考えること）』、『実態把握の力をもつこと』であった。特に高めたい力量としては、6名中4名が、『肢体不自由教育に関する様々な指導法を学ぶこと』、『実態把握の力をもつこと』を挙げ、肢体不自由特別支援学校の勤務経験が浅い中で、日々の実践の向上につながる実践的な技量を高めようとする姿勢が伺われた。また、実態把握に関する項目が挙げられていることは、在籍児童生徒の重度・重複化が顕著である対象校において、実態把握の困難さに直面する姿が表れたものであると考える。なお、このようなニーズの中で、実践を省察する姿勢をもつことの必要性が挙げられており、実践的な技量を高める必要性和同時に、自身の日々の実践をかえりみながら、その実践を確かなものとしていく姿勢も伺われた。

(2) 熟達した教員

熟達した教員が経験の浅い教員に継承したい、養って欲しい力量としては、全員の教員が、『本人主体の支援者として寄り添うこと』、『実践を省察する姿勢をもつこと』、『障害のある子どもと人間としてきちんと関係がもてること』の3項目が挙げられた。特に重視する項目については、複数の者が挙げた項目として、『本人主体の支援者として寄り添うこと』、『保護者や他職種との連携ができること』、『障害のある子どもと人間としてきちんと関係がもてること』、『実態把握の力をもつこと』、『実践を省察する姿勢をもつこと』の4項目があった。熟達した教員が経験の浅い教員に求める力量として、子ども主体、本人主体である特別支援教育の根幹にかかわる姿勢を第一にしていることを伺うことができた。また、実践を省察する姿勢をもつことについては、経験歴の中で実践知を蓄えてきた熟達した教員が重要視する力量として捉えることができる。特に重視する項目に顕著な重なりはみられなかったが、熟達した教員が実践者として、先輩教員として継承したい、養って欲しい力量として、その思いが表れたものであるといえよう。

(3) 管理職

管理職が経験の浅い教員に養って欲しい力量として全員が挙げたものは、『自立活動と教科の関連を理解すること』、『子どもの支援に必要な人と手を組むこと』、『障害に関する必要最小限の知識をもつこと』、『実態把握の力をもつこと』の4項目であった。特に重視する項目については、半数が挙げた項目としては『肢体不自由教育に関する様々な指導法を学ぶこと』、『子どもの支援に必要な人と手を組むこと』、『実践を省察する姿勢をもつこと』、『課題設定の力をもつこと』の4項目があった。管理職全員が挙げた項目からすると、在籍児童生徒の重度・重複化が顕著である対象校において、現場の状況に対応すべく、即戦力としての役割を果たすことを求める姿勢が伺われるものであると考える。特別支援学校の特色であるチーム・ティーチングへの対応、障害に関する必要最小限の知識理解、肢体不自由教育にかかわる指導法の習得、自立活動の理解などはその顕著な項目として捉えることができるといえよう。

2) 三者の意識の相違

経験の浅い教員、熟達した教員、管理職の3者が挙げた項目の中で、共通したものは、『肢体不自由教育に関する様々な指導法を学ぶこと』、『実践を省察する姿勢をもつこと』、『子どもの支援に必要な人と手を組むこと』、『実態把握の力をもつこと』の4項目であった。ことから、より重要視されるべき力量であることが示されたものであるといえよう。

経験の浅い教員と熟達した教員が共通して挙げた項目としては、『多様な教育的ニーズへの対応ができること（教科指導と重度重複障害のある児童生徒双方を受けもつこと）』、『実践を省察する姿勢をもつこと』、『課題設定の力をもつこと』、それぞれ1項目であった。

一方で、管理職と熟達した教員が挙げた項目は、『本人主体の支援者として寄り添うこと』、『「肢体不自由を治す」のではなく「子どもの主体性伸長すること」』、『保護者や他職種との連携ができること』、『障害に関する必要最小限の知識をもつこと』の4項目が挙げられており、子ども主体、本人主体の特別支援教育の根幹に関わる視点、チーム・ティーチング、保護者や他職種との連携といった人間関係に関わる視点、子ども理解に関わる障害理解の視点などが盛り込まれている。管理職、熟達した教員が求める力量として、特徴的なものとして捉えることができると考えられよう。

経験の浅い教員の専門性向上に向けた研修内容を検討していく上では、当事者のニーズのみに着目するのではなく、3者に共通して挙げられた項目を中心としながら、経験の浅い教員、熟達した教員、管理職、それぞれ2者で共通した項目にも着目して、学校組織としての専門性向上の研修を検討、立案していくことの必要性が示されたものであるといえよう。

2. 肢体不自由教育における実践的技量について

回答の結果を表2に示した。なお、記載した項目は、3者それぞれが回答した項目で、過半数を超える教員が回答した項目を採り上げた。なお、特に重視したい項目については、熟達した教員、管理職で過半数の教員が回答した項目がみられたが、経験の浅い教員ではみられなかった。そのため、複数回答があった項目をすべて記載した。

表2 具体的な実践的技量（肢体不自由教育）に関する内容

経験の浅い教員・熟達した教員・管理職が共通して挙げた内容		
<ul style="list-style-type: none"> ・ 疾病や障害／健康管理についての知識 ・ 補装具・自助具の知識と取り扱い方 ・ コミュニケーション支援に関する知識と技術 ・ 摂食指導の技術 ・ 医療的ケアの知識 		
経験の浅い教員・管理職が共通して挙げた内容	経験の浅い教員・熟達した教員が共通して挙げた内容	熟達した教員・管理職が共通して挙げた内容
※該当なし	<ul style="list-style-type: none"> ・ 運動・動作に関する指導の知識 ・ 運動・動作に関する指導の技術 ・ 重度・重複障害児の指導原理・方法の知識 ・ 摂食指導についての知識 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個別の教育支援計画を作成し活用するための知識・技術 ・ 指導計画を生かした授業力、または実践的指導力 ・ 卒業後の進路先や福祉制度に関する知識
経験の浅い教員が挙げた内容	熟達した教員が挙げた内容	管理職が挙げた内容
<ul style="list-style-type: none"> ・ コンピュータ等の操作技術 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 運動発達や運動生理学等に関する知識 ・ 認知発達に関する知識 ・ 言語発達に関する知識 ・ 対人関係・社会性の発達に関する知識 ・ AAC（拡大代替コミュニケーション）に関する知識と活用 ・ 重度・重複障害児の指導原理・方法の知識 ・ 緊急時の処置の知識・技術 ・ 指導計画を作成するための知識・技術 ・ 保護者対応・支援に関する知識 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特別支援教育の今日的動向に関する知識

1) 三者ごとの意識の状況

(1) 経験の浅い教員

経験の浅い教員が、自身が高めたい力量として、6名中5名が挙げたものは、『コミュニケーション支援に関する知識と技術』、『医療的ケアの知識』であった。特に高めたい力量については半数であるが、『摂食指導の技術』が挙げられた。補装具・自助具の知識と取り扱いや運動・動作に関する指導の知識・技術等の肢体不自由教育ならではの項目が挙げられる中で、コミュニケーション支援や医療的ケア、摂食指導に関する項目が多く挙げられたことは、肢体不自由、中でも重度・重複障害のある児童生徒を目の前にして、その実践に向かう経験の浅い教員の喫緊の課題としての捉えが表れたものであると考えられよう。

(2) 熟達した教員

熟達した教員が経験の浅い教員に継承したい、養って欲しい力量として、全員の教員が、『疾病や障害／健康管理についての知識』、『運動・動作に関する指導の知識』、『認知発達に関する知識』、『言語発達に関する知識』、『摂食指導についての知識』、『医療的ケアの知識』の5項目を挙げた。特に重視する項目については、全員が『疾病や障害／健康管理についての知識』、過半数の教員が『指導計画を生かした授業力または実践的指導力』を挙げた。疾病や障害／健康管理についての知識については、重度・重複障害のある児童生徒の教育に携わる上で、日常のバイタル・チェック等の生命維持に直結する業務に携わることが求められる中で、教員が身につけるべき必須の課題として挙げられたのではないかと考えられる。医療的ケアや摂食指導に関わる項目は同様の視点ではないかと思われる。また、上位に挙げられた項目のほとんどが、知識の習得を求めているものであることも着眼すべき点である。運動・動作、認知発達、言語発達等の児童生徒を捉えるためのアセスメント力を身につけることを強く求めていることが伺われる。授業力または実践的指導力が求められる一方で、児童生徒を捉えるための基盤となる基礎的・基本的な知識の習得をまずは重視する熟達した教員の思いが表れた結果であると考えられよう。

(3) 管理職

管理職が経験の浅い教員に養って欲しい力量として全員が挙げたものは、『疾病や障害／健康管理についての知識』、『補装具・自助具の知識と取り扱い方』、『摂食指導の技術』、『個別の教育支援計画を作成し活用するための知識・技術』、『指導計画を生かした授業力または実践的指導力』の5項目であった。特に重視する項目については、4名中3名が『疾病や障害／健康管理についての知識』を挙げた。管理職全員が挙げた項目からみると、熟達した教員同様、疾病や障害／健康管理についての知識が第一に挙げられている一方で、個別の教育支援計画を作成し活用するための知識・技術や指導計画を生かした授業力または実践的指導力が上位に挙げられていることが特徴的である。個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成、そして、それに基づいた実践力が求められていることは、経験の浅い教員についても、学校として即戦力としての役割を果たすことが求められていることの表れではないかと思われる。また、卒業後の進路先や福祉制度に関する知識、特別支援教育の今日的動向に関する知識についての項目が他者よりも高い割合で挙げられていることは、管理職ならではの視点として捉えることができると考えたい。

2) 三者の意識の相違

経験の浅い教員、熟達した教員、管理職の3者が挙げた項目の中で、共通したものは、『疾病や障害／健康管理についての知識』、『補装具・自助具の知識と取り扱い方』、『コミュニケーション支援に関する知識と技術』、『摂食指導の技術』、『医療的ケアの知識』の5項目であった。先述したように、いずれの項目についても、重度・重複障害のある児童生徒を対象とした教育実践を行う上で重要となる項目であり、対象校が直面する実情が顕著に表れた結果であるといえよう。

経験の浅い教員と熟達した教員が共通して挙げた項目は、『運動・動作に関する指導の知識』、『運動・動作に関する指導の技術』、『重度・重複障害児の指導原理・方法の知識』、『摂食指導についての知識』の4項目であった。自立活動を中心とする教育課程で学習する児童生徒が大半を占める中で、運動・動作や摂食指導に関する実践に直結する課題が挙げられていることは、日々の直接的な指導に携わる実践者として一致し

た視点であると考えられよう。

熟達した教員と管理職が共通して挙げた項目は、『個別の教育支援計画を作成し活用するための知識・技術』、『指導計画を生かした授業力または実践的指導力』、『卒業後の進路先や福祉制度に関する知識』の3項目であった。経験の浅い教員の意識に比べ、個別の教育支援計画、指導計画の作成と実践力をより求めていることが示された。

おわりに

本稿は特別支援学校教員の専門性、特に、経験の浅い教員が継承したい、経験の浅い教員に継承して欲しい具体的内容について学校現場のレベルで具体的に検討する際の手がかりとなるような資料を収集することを目的とした。その結果、専門性継承の内容について、管理職、熟達した教員、経験の浅い教員の視点から検討することで多様な視点からの意見が得られ、それぞれの立場が求める内容と共通する内容を明確にすることができた。これらの内容は、専門性を継承していくためのシステムづくりを学校現場が検討していく上で有用な情報となるものであると思われる。教員個人の専門性向上の視点のみでなく、学校組織としての専門性向上が求められる今日において、学校現場における具体的な専門性継承のためのシステムづくりについて、経験の浅い教員に焦点を当てた検討を今後も重ねていきたい。

謝辞

校務多忙な中、調査にご協力いただいたA特別支援学校の方々にお礼を申し上げます。

文献

中央教育審議会教員の資質能力向上特別部会（2010）教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（審議経過報告）。

加藤正仁（2008）早期療育から特別支援教育に期待するもの。特別支援教育，29，10-15.

川住隆一（2006）なぜ今、改めて専門性が求められるのか。特別支援教育，23，4-8.

国立特殊教育総合研究所（2010）肢体不自由のある子どもの教育における教員の専門性向上に関する研究—特別支援学校（肢体不自由）の専門性向上に向けたモデルの提案—平成20年度～21年度研究成果報告書。

永松裕希（2006）障害の重複化に対応した新たな支援体制の必要性。特別支援教育，23，9-13.